

「三中校長脳卒中で倒れちゃった⑦」

保護者の方から、「今年の校長室だより裏面の不定期コラムを読みたい」とのご要望をいくつかいただきましたので、本校ホームページの「校長室より」に、昨年度の「校長室だよりコラボレーション」から裏面だけを集めて掲示していますのでご興味のある方はご覧ください。

第三中学校ホームページ

第三中学校ホームページでも子どもたちの様子やお知らせなどを情報発信しています。ぜひ、ご覧ください。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>



【障がい者として生きるということ①】

今回の脳出血で左半身不随になった私ですが、想像していたよりは、気持ちを早く立て直すことができました。それはこのコラムのNo.2で触れたように気持ちの準備ができていたこと、No.3で触れたように立腰で落ち着いて考えられた成果ですが、自分の障がいを受容できたのは、中学校の教員として、人権教育と出会ったことが根底にあるような気がします。そのあたりの話は、No.1で止まっている「私の第一声」の続きで、今後改めて書きたいと思うのですが、今回のテーマに関連するので概略だけ触れると、初任に勤めた中学校と小学校で、人権教育を大切にしながら、学級づくり、生徒指導、国語科教育、自主活動、そしてクラブ活動に19年間取り組んだ後、大阪府教委と貝塚市教委に併せて7年間勤務（ここでも人権教育担当となりました）し、やっと学校に復帰、三中に赴任した、という人生でした。この時取り組んだ人権教育の柱の1つが、人権課題当事者の方からの聞き取り学習と、聞かせて頂いたお話を生徒が自分の事に置き換えて心に落とし込んでいく取り組みだったのです。

ところで、人権課題って何でしょうか？ 国は閣議決定で人権課題として、「障がい」「外国人」「同和」など、本人の努力ではどうしようもないルーツや状態を理由に、差別をしたり、人格を否定したりされることがある課題を13個と、加えて「その他」を定め、その解消に

取り組むよう学校にも求めています。

人は、知らないことに怖さや忌避意識を感じます。だから例えば、「障がい」について、学校で取り組むことを障がい理解教育と呼びますが、このことで生徒がまずすべきことは、障がいについて知ることです。そして、それが特別なことでなく、自分と地続きであると感じ、さらに、その障がいと共に生きている方の生き様から、生徒が自分自身の生き方のヒントを得ることが出来れば、「障がい者」というだけで差別したり忌避意識を持つことはなくなります。だから、これまで、何人ものいわゆる障がい者の方から、生徒にお話をさせていただきました。車いすユーザーや視覚や聴覚の不自由な方、精神障がいや高次脳機能障がいの方、ダウン症の方などからです。

さて、私の人生に戻ります。現場復帰を喜んだのも束の間、4か月もしないうちに脳出血で倒れました。入院初期は、左半身が完全にマヒしていたので、周りから見て現場復帰できるとは思えなかったようですが、私は必ず復帰する気でした。その時ずっと考えていたのは、自分が復帰した時、自分自身のことを起点として、障がい理解学習を進められないかということでした。もちろん、障がい者として、日の浅い私が、人権課題当事者として、講演をしてもしかたありません。語れる事実もなければ生き様もないのですから。

一方で人権教育に長く関わっていたので障がいに関する事象が学校でたくさん起こっていることを知っています。特に、SNSという、まだ歴史の浅いメディアが拡がり、その中で人を攻撃するきつい言葉が溢れ、やり取りがエスカレートする中で、差別的な言動も増えているといわれています。子どもたちにもSNSが浸透していく現在、中学生もその影響から逃れることはできません。

「そうだ、自分をきっかけに、気になることや、それにつながるものが起きた時が取り組みのチャンスなのかもしれない」。入院中、復帰後に自分をきっかけにどんなことが起こる可能性があるか考えました。予想していたのは、事象として「障がい者を貶めるような言葉が聞こえてくる」「校内で障がいに関する落書きがある」、事象とは言えなくても、そこにつながる気になることとして「足を引きずったり手が不自由な姿をまねする」「まねしている友達を見て笑う」などでした。

何とか復帰できたのは、倒れてから半年、令和3年1月でした。

【不定期コラムNo.9】へつづく